

# 母性看護学実習における実習指導者のかかわり

## 学生カンファレンスと学生の学びから考える

表 五月<sup>1)\*</sup>, 谷本 恵理<sup>1)</sup>, 高畠 佐代子<sup>1)</sup>, 古川 京美<sup>1)</sup>, 三好 順子<sup>1)</sup>,  
関亦 頼子<sup>2)</sup>, 榮 玲子<sup>2)</sup>, 松村 恵子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>香川県立中央病院

<sup>2)</sup>香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

### Involvement of Leaders for Practical Training in Training in the Science of Maternity Nursing

#### —Student's Opinions Gained from Their Conferences and Their learning—

Satsuki Omote<sup>1)\*</sup>, Eri Tanimoto<sup>1)</sup>, Sayoko Takabatake<sup>1)</sup>,  
Kyomi Hurukawa<sup>1)</sup>, Junko Miyoshi<sup>1)</sup>,  
Yoriko Sekimata<sup>2)</sup>, Reiko Sakae<sup>2)</sup> and Keiko Matsumura<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Kagawa Prefectural Central Hospital

<sup>2)</sup>Department of Nursing, Faculty of Health Sciences,  
Kagawa Prefectural College of Health Sciences

#### Abstract

Contents that can be experienced by a student in practical training is limited. In reality, not all students can have the same practices. Conferences is an important way of deepening learning by the whole group in practical training for a short period, irrespective of whether one has experience or not. Accordingly, we have carried out an analysis of the contents of the conferences after practical training and what he student's learned from them. As a result, ① Learning by an individual student has become deepened through conferences, even if the subject is what he has not experienced before. ② To decide their theme before their conferences enable them to prepare their study and their understanding of maternity nursing to be deepened. ③ It has been clarified that progress has been seen in their understanding of the mothers and their children after their experiences in practical training and the concept of maternity nursing, even if it has been experienced for the first time.

**Key Words** : 母性看護 (Maternity Nursing), 実習指導者 (Instructors), 学生カンファレンス (Student's Conferences), 学生の学び (Student's learning)

\*連絡先: 〒760-8557 香川県高松市番町5丁目4番16号 香川県立中央病院 表 五月

\*Correspondence to: Satsuki Omote, Kagawa Prefectural Central Hospital 5-4-16, Ban-cho, Takamatsu-shi, Kagawa, 760-8557, Japan

## はじめに

著者らの病棟では、毎年5月から11月にかけて医療短期大学の看護学生（以下、「学生」という）の母性看護学実習の場として約50人の学生を受け入れている。

母性看護学実習での対象は、妊娠・分娩・産褥・新生児期にある者およびその家族が対象である。各期の特徴はそれぞれ大きく異なるが、これらは短い期間の中で連続し、変化している。各期の特徴を理解し、援助できるまでには長期の実習期間が必要と考える。

しかし、実習カリキュラムの見直しに伴い、学生の病院での実習は減少しており、当院での母性看護学実習も2週間（正味8日間）という短い期間である。この期間に学生は病棟（新生児室を含む）の他に、外来、マザークラス等への参加も行っている。このような過密スケジュールの中、学生個人が経験し学んでいくだけでは、母性看護学実習の目的・目標に近づくことには限界があると思われる。

学生は短い実習期間の中で、有効に時間を活用するために、グループメンバーの学びを共有することが必要であると考えた。そして学生が学びを共有し、深めるためには、実習指導者として学生とどう関わるか、また重視する点はどこにあるか、知る必要があると考えた。

学生は、グループ単位ではなく個人もしくは2～

3人で実習するため、学生がグループ間で学びを共有し、意見を交換する場はメンバー全員が揃うカンファレンスだけである。

実習中のカンファレンスについて、小野<sup>1)</sup>は、「他の発言を聞きながら、各人がそれぞれ自己を点検し、自己対話しながら自己の傾向と現在の達成度を自覚し、人との関係や看護の未知の部分を見出す機会ともなります」と述べており、カンファレンスが学生の学びを深める重要な場になると考えた。

グループ内で行うテーマカンファレンスが、どのように学生個人の学びとして反映されるのか、当病棟で実習を行った4つのグループのカンファレンステーマとそのグループに所属する学生の学びのレポートを照らし合わせ、考察した。その結果、カンファレンスが学生個人の学びを深め、また、経時別に比較することで、病棟実習を重ねた、すなわち後のグループになるほど学びも深まっていることを認めた。これらの結果より、母性看護学実習の目的・目標達成におけるカンファレンスが果たす役割の重要性を明らかにできたので報告する。

## 研究方法

1. 期間：平成16年5月～7月（1グループ2週間の実習）
2. 対象：看護学科3年生24名 4グループ（1グループ6名で構成）

表1 母性看護学実習の目的・目標

目的	妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある対象およびその家族、女性のライフサイクルにおける健康問題を解決するための基礎的な看護能力を養う。
目標	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 妊娠期の特徴を理解し、妊婦の看護ができる。</li><li>2. 分娩期の特徴を理解し、産婦の看護ができる。<ol style="list-style-type: none"><li>1) 分娩期の生理的経過が理解できる。</li><li>2) 母子の健康状態や分娩進行を判断するための観察について理解できる。</li><li>3) 分娩期の産婦や家族の心理状況について知り、産痛および不安の軽減に対する援助について理解できる</li></ol></li><li>3. 新生児期の特徴を理解し、新生児の看護ができる。<ol style="list-style-type: none"><li>1) 出生直後の新生児の生理とケアについて理解できる。</li><li>2) 新生児の成長発達過程が理解できる。</li><li>3) 新生児の健康問題を抽出し、問題を解決するための援助ができる。</li></ol></li><li>4. 産褥期の特徴を理解し、褥婦の看護ができる。<ol style="list-style-type: none"><li>1) 産褥経過が理解できる。</li><li>2) 褥婦の健康問題を抽出し、問題を解決するための援助ができる。</li><li>3) 母子関係成立の向けての援助ができる。</li></ol></li><li>5. 保健医療チームの連携と看護者の役割が理解できる。</li><li>6. 性と生殖に関する生命倫理について考えることができる。</li></ol>

※病棟実習において特にかかわりのある、分娩期・産褥期・新生児期について実習要項より詳細を抜粋する。

## 3. カンファレンスの実施方法

母性看護学実習の目的・目標は表1の通りである。これに基づいてカンファレンスは以下の如く実施される。

実施日：毎週金曜日午後実施

時間：約30分

場所：病棟 学生記録場所

種類：テーマカンファレンス（1回ごとにメンバーの受け持ち事例を1例提出）

内容：実習目標に沿ったもので、受け持ち事例の援助を中心に討議する

参加者：実習学生、実習指導者、看護主任、看護師長、教員

進行：メンバーの一人が司会進行を行い、一人が書記を行いながらメンバー全員の参加の中で、教員と病棟スタッフ（病棟師長

・実習指導者など）を交え、話し合う。時間配分は学生が決めているが、全時間の3分の2は学生のみで話し合い、残り時間で教員や病棟スタッフが助言を行う形をほとんどのグループがとっている。実習指導者からの助言は、学生の意見に出てこなかった違う角度から見た意見や考えを加える他、学生から出た意見をさらに広げる形で行うようにしている。

4. 学びのレポート：テーマや決められた基準はなく、ケアを通して学んだこと、実習目標への到達状況などを含んだ内容とし、実習終了後1週間以内に提出される。

5. 分析方法：カンファレンスのテーマを頼りに、母性看護学実習後に提出される学生の学びのレポートからそのテーマと合致した箇所を抜粋し、カ

表2 カンファレンスで得た学び（学びのレポートより）

グループ	カンファレンステーマ	学生の学びより	達成目標
1	1回目 母乳栄養を確立するための援助について	・子宮復古の観察や乳房の緊満の状況などは実際に自分の手で観察しなければならない・観察、指導をするときに何をすることだけだけでなくなぜしなくてはいけないか、と深くまで考えることが必要と学んだ	4-1)
	2回目 産褥期の貧血に対する援助	・乳房マッサージのパンフレットを作り、退院後の自己管理につなげるよう指導できた ・母子双方に起こりうる問題を予測して働きかけていくことが大切なんだと学んだ	4-2) 3-2)・4-1)
2	1回目 会陰裂傷に伴う苦痛と不安に対する援助	・産科病棟では関わられる期間が短いからこそ早期に患者にとって一番問題となっていることは何かということをはっきりと明らかにし、早期から問題解決のために看護を展開していかなければならないことを学んだ	4-1,2)
	2回目 3人の子供に対する接し方と皮膚の奇形宣告に悩む母親の援助	・初産婦と経産婦での心理的な面での違いを把握し、母親への様々な指導を行うことが大切である ・産婦人科の看護婦の役割とはこれからの生活を円滑に送れるように母と子、その家族に対して身体的、心理的に適切な援助が必要となる・夫、家族を知ることが産科での看護を行うにあたりとても大切であることを学んだ	4-1,2) 4-2)
3	1回目 直接授乳が困難な児を持つ母親に対する援助について	・実際に乳房マッサージを行っている様子を見ていけば、状況の把握ができ、一緒に行うことでより正確な乳房ケアが行えるようになり、退院後の自己管理につなげることができたかもしれない・授乳に関する話も大切であるが、もう少し色々な話をするとうまくいかなかった母親が今どんな状態でどんなことを不安に思っているのか明確になり、授乳以外にも援助を行えたと思う	4-1)
	2回目 母乳分泌不足の母親への援助	・一人一人の入院前の生活、退院後の生活を考慮して、褥婦さんに合ったケアを考えていけばよかった・継続的な援助を望む際、必要なのは家族構成や背景であり、褥婦が退院後実施可能なことか振り返り、援助を行う側の視点で見るとは、褥婦の視点に立ち物事を考えなければならない ・母乳育児の利点を考慮して、母親に母乳育児に対しての意欲を高められるよう援助していたが、双子を連れての退院後の生活を考えたら、少しでも多くの睡眠時間を取れる授乳の方法を一緒に考えることが必要の援助だったと思う	4-2) 4-3)
4	1回目 母子分離により母子愛着形成ができていない母親への援助	・褥婦の発言だけを情報としてアセスメントするのではなく、実際に児と関わっている姿を自分の目で見てアセスメントできればよかった・生まれてきた子どもに対してどう感じているのか、言動の他に行動や表情からも把握し、そして愛着形成がうまくできていないようならばその原因はどこにあるのかを知り、援助していかなければならない	4-3)
	2回目 分娩時の出血が多く胎盤遺残により弛緩出血がみられた褥婦の貧血に対する援助	・回復が遅れている褥婦に対し、一般的な回復にどうすれば近づくことができるのか、何ができるのか、退院までの間の援助として何が関わられるのかもう少し考えながら観察し、アセスメントし、退院後の生活に取り入れられる様な内容を指導する必要がある	4-2)

ンファレンスが行われた順に経時的に並べ比較検討した。

6. 倫理的配慮：今回の研究に当たり、学びのレポートの使用に際して、学生の記述した内容が特定されないように表現を工夫し、配慮した。また記録は、研究目的にのみ用いた。

## 結 果

各グループの学生の学びのレポートからカンファレンスのテーマと合致する箇所をカンファレンスから得た学びと考え、カンファレンスが行われた順に表2にまとめた。また、学びの内容が実習目標に到達したと判断できるものについて、母性看護学実習の目標の番号(表1)を付け加えた。

表2をまとめるにあたり、学生の学びのレポートから抜粋した内容を目標に合わせて分類することで、各グループがカンファレンスにより達成した目標を確認することができた。しかし、カンファレンスの内容が産褥期を中心に展開されているため、目標の達成にも影響し産褥期の特徴の理解が主だったものとなっている。加えて、母性看護学実習の産褥期の目標は3項目の内容で表現されているため、グループ間の目標達成に関する差や特徴を明確に示すことはできていない。

## 考 察

カンファレンスは「母乳育児」や「貧血」などのテーマに沿ってディスカッションされている。

「母乳育児」については乳房の観察の方法や、乳房マッサージについて、自己管理とその指導方法、退院後の生活に合わせた授乳の方法などを、「貧血」をテーマにしたグループは、産褥期の貧血の観察と援助などについて学生は学んでいる。

グループごとに比較をしてみると、同様のテーマを選択していても保健指導の内容や方法、援助すべき対象がグループによって変化していることがわかる。

「母乳育児」をテーマにした1グループの対象は母子であるが、3グループでは母子のみでなく家族や母子の背景にも焦点を当てられている。また「貧血」をテーマにした1グループでは、貧血に対する観察と日々変化する状態に合わせた援助の必要性について学び、4グループでは、退院後の生活を考慮した内容を盛り込んだ指導を入院中に行うことの必

要性を学んでいる。

テーマに沿って学生の学びをまとめてみると、ひとつのテーマを様々な視点でディスカッションすることで、テーマについての学びを深めると共に、実習期間中で特に深い関わりを持つ産褥期の特徴の理解や、必要な援助へと結び付けて考えることができている。

表2で示す「達成目標」の項目は、学生の学びの内容により母性看護学実習の目標が達成されたと判断できたものである。しかし、項目だけに注目するとそれほどグループ間に目標の達成に大きな差はなく同程度である。しかし、カンファレンスで得た学びを産褥期の特徴理解の面から分析すると、実習経験を積んだ後半のグループの学生の学びがより深まった形となっている。

江守ら<sup>2)</sup>は、産褥期について、「身体的・精神的・社会的変化が短期間のうちに顕著にあらわれ、これに変化の著しい新生児の世話や家族関係の再調整といった生活面の課題が加わる」と述べている。学生が産褥期の特徴を理解するために必要なのは、身体的・精神的・社会的変化に気づくことから始まると考える。

身体的変化に対する理解は、看護学生が実際に行った観察や看護から学び取っていることがわかる。

1グループは観察の必要性と方法を理解し、そこから得た情報により状態に合わせた看護を考えることの重要性を、2グループは短い入院日数を考慮して早期から問題解決に乗り出す必要性を感じている。

江守ら<sup>2)</sup>は産褥期の観察について「褥婦と接触する時間が分娩後数日という短期間にすぎなくても、多面的かつ長期的予測を含む観察が要求される」としており、学生は産褥期に必要とされる観察の意義について理解が深まったと考えられる。

学生は褥婦の精神面へ関わる際に、どのような情報が必要でその情報を収集するための方法やアセスメントについて、実習を重ねたグループほど深く考えることができている。

褥婦の精神状態を「妊娠・分娩からの開放感や達成感、また子供を得た喜びや児に対する母性感情などが顕著にあらわれ精神的の高揚状態にある。それにもかかわらず、気分や感情は非常に不安定で変動しやすい」と江守ら<sup>2)</sup>は説明している。学生は身体的変化や社会的変化に対応することに追われながらも、その変化に気づき、対応についても考えようとしている。これは、それまでの病棟実習で、身体に

対する看護だけでなく精神的な看護が必要な患者と関わってきた経験が活かされた結果と考える。

学生の援助対象をグループ順に見ていくと、1・2グループでは褥婦、新生児といった個別のかかわりから、母と子を併せたかかわりの大切さに気づき、3グループ以降は母子とのかかわりの中でそれをサポートする夫や家族へのかかわりの必要性を学んでいる。先にもあるように、産褥期は家族関係の再調整する時期である。学生は、援助対象から家族関係、そして社会的変化について徐々に理解を深めている。

今回の研究で、カンファレンスは学生個人の学びを深める重要なポイントとなり、病棟実習を重ねたグループほどその学びも深まり、母性看護学実習の目的・目標達成に大きな役割を果たすことがわかった。

臨床実習でのカンファレンスについて、K.B. ゲイバーゾン<sup>3)</sup>は「学生が患者の情報を共有し、看護実践について話し合い、他の人たちを導き、グループの考えをまとめ、発表するためのディスカッションである」と述べている。学生はカンファレンスの場において自分の担当する褥婦やそれらを取り巻く問題についての情報を共有し、話し合うことで自分の看護を振り返り、次からの道しるべとしている。個人では思いもよらなかった意見を聞き、考えることで学びを深め短期間の実習では経験することが困難であっても、他の学生の経験を基にディスカッションすることで擬似体験している。

以上の結果を考慮し、実習場面やカンファレンスで学生と関わる際、学生のそれまでの経験を理解し、活かせるような実習方法を、そして未経験の学生が経験した学生と同じような学びを得られるような場を提供することが実習指導者の重要な役割と考える。

小野<sup>1)</sup>は学生とのかかわりについて「経験は学生自身の確かな成長を支えるもとになる(中略)学生自身が看護実習の成功体験によって一期一会を実感できるように」と述べている。たとえ、カンファレンスという擬似的な実習場面においても、学生の考える看護行為の意味を共に振り返り、再構成することで学生はさらにそこから学びを深める。様々な体験は学生の学習意欲を左右し、成功体験は学生を感動させ、自信にもつながる。学生の考えた看護行為が成功体験に結びつくようなかかわりと、たとえ成功せずとも対象との出会いが今後の看護に活かせるような働きかけを実習指導者として行っていく

必要がある。

以上のことより学生と関わる際、実習指導者がとるべき姿勢について、以下のように考えた。

1. カンファレンスを通してグループに所属する全員が共に考え、自分の意見を自由に表現でき、各自の個性が活かされる雰囲気を提供する。
2. それまでの実習経験を尊重し、それを活かすことができるような看護について共に考えいく。

## まとめ

当病棟で実習を行った4つのグループのカンファレンステーマとそのグループに所属する学生の学びのレポートを照らし合わせた結果、以下のことが明らかになった。

1. 個人が実習期間中に経験できなかったことに関しても、カンファレンスを通してディスカッションすることで学生個人の学びが深まる。
2. テーマカンファレンスを行うことで、テーマについての学びが深まると共に、母性看護学実習の目標達成に大きな役割を果たす。
3. 初めて経験する実習病棟であっても、実習を重ねたグループほど広い視野で対象を理解し、援助する方法を考えることができる。

今回の研究では、カンファレンステーマに沿って分析を進めたため、産褥期に関する学びが中心となった。母性看護学実習は、妊娠・分娩・新生児期も含まれる。今後は、各期の学びについて理解を深めることを課題としたい。

## 文献

- 1) 小野殖子(1987)“看護教育の視座一手づくりの教育をめざして”, ゆみる出版, 東京, p144-150.
- 2) 江守陽子, 阿部セツ子(1995) 褥婦の看護における観察, “看護観察のキーポイントシリーズ [母性]” (前原澄子編) 中央法規出版, 東京, p153-186.
- 3) Kathleen B. Gaberson, Marilyn H. Oermann (1999) “Clinical Teaching Strategies in Nursing”, Springer Publishing Company, [勝原裕美子, 増野園恵, 井上真奈美, 渋谷美香訳(2002) “臨床実習のストラテジー” (勝原由美子監訳), 医学書院, 東京, p199-221.]

受付日 2004年10月29日